様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ３０ 日現在

機関番号：３２６８２
研究種目：若手研究
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ１２５９０

研究課題名（和文）内戦後のカンボジア農村開発に関する民族誌的研究：国家・NGO・農民関係に着目して

研究課題名（英文）An ethnographic study of rural development: state, NGO and farmer relationship in post-conflict Cambodia

研究代表者
秋保　さやか（Akiho, Sayaka）

明治大学・研究・知財戦略機構（駿河台）・研究推進員

研究者番号：４０７９７１６４

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、内戦後クメール人のNGOによって実施され、国内外から「成功例」と評される参加型農村開発プロジェクトにおいて、一部の農民らによるNGOへの抵抗・離脱が引き起こされた事例を取り上げた。そのプロジェクトの過程でNGOと農民が相互行為を通して関係性を再編するあり様を検討した結果、外来の参加型理念を受容した一部の農民がNGOからの自律を模索して抵抗・離脱に至った一方で、多くの農民は従来から支配的だったNGOとのパトロン・クライアント関係の継続を希求するといった多様な開発との向き合い方を生み出したことが明らかとなった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究は、開発支援の領域における支援者と被支援者の二者関係に着目して議論されることが多かった先行研究群に対し、開発以外の領域横断的な相互行為と「開発支援ならざるもの」も含みこんだ言説と実践が織りなす場として開発を捉え直した点において学術的意義があると言える。
また、80年代以降国際開発の領域において広く普及した参加型理念がいかに現地社会に受容され、意図せぬ結果を引き起こしたのかを詳らかにしたうえで、その要因を明らかにした点において社会的意義があると言える。

研究成果の概要（英文）：This study focuses on a participatory rural development project implemented by a Khmer NGO after the civil war, which is regarded as a "success case" both domestically and internationally. In this study, the interactions between NGOs and farmers created in the project process and the resulting restructuring of the relationship were explored. The results showed that participatory development projects led some farmers to resist and disengage from NGOs because of their acceptance of foreign participatory ideals and their search for autonomy from NGOs. On the other hand, other farmers desired to continue the traditionally dominant patron-client relationship with NGOs. It was found that a variety of ways of dealing with development regarding autonomy and dependence on NGOs were created.

研究分野：文化人類学（開発人類学）

キーワード：農民　NGO　支援　農村開発　カンボジア　参加型開発　国家　自律

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

人類学を含む様々な学問分野において、開発現象が盛んに議論されるようになって久しい。開発は、第二次世界大戦以降西欧諸国が中心となり、いわゆる「途上国」社会に対し行ってきた近代化促進を目的とした外部からの介入である。

人類学者は、これらの開発現象をローカル社会の変容を促すグローバルな現象と位置づけ、その社会・文化的影響の把握を試みたり、ポストモダニズムの影響から、開発を通し自らの権力の維持、搾取構造の再生産を行う現象として捉え研究を行ってきた。

1980 年代以降の開発において大きな転換点となったのが、参加型開発の流行である。参加型開発とは、トップダウン型の開発アプローチへの反省から登場した開発理念・手法であり、外部者である開発の専門家が開発の目標や未来像を描くのではなく、現地の人々が開発の計画・実施段階から「主体的に参与」することが求められる。

代表的な参加型開発論者であるチェンバース［チェンバース 1996］によれば、社会的弱者と位置づけられる人々が主体的に開発事業の過程に参加するためには、支援者と被支援者の間にある「力関係の逆転」が必要だという。このような参加型開発による支援者と被支援者間の関係性の変化や維持の問題は、実践者のみならず、人類学者からも主要な関心事の一つとして着目され続けている［Long 2001, Mosse 2005, Cornwall 2011］。

他方、2000 年代初頭頃から「参加型」と銘打った開発であっても、既存の権力関係を維持・再生産するという「専制(tyranny)」的側面があることが指摘されるようになった［Cooke and Kothari 2001］。参加型開発が主流化することにより、それが形式化されたパッケージとして普及され、「力関係の逆転」といった元来理念に内包されていた思想が抜け落ちたまま流布され、プロジェクトの正当性を担保するための技術論へと転換されていった［White 2000］。それによって、本来は関係性の変容を含みこむはずの「参加」が、管理的・技術的対応につながり、結果的に「力関係の維持」につながっているという批判であった［Hailey 2001］。その後、参加型開発は力関係の変容（人々の自律）を生み出すものか、もしくは力関係の再生産（依存）装置か、という大きな議論へと展開した［Hickey and Mohan 2005］。このように、参加型開発において支援者と被支援者間の力関係が議論の焦点となってきたと言える。こうした研究動向を受け、参加型開発の政治に着目した民族誌的研究が報告されている。しかし、グローバルな開発理念をローカルな人々がいかに取り込みつつ、政治的実践が行われているのか、また、人々はいかに自律性を保ちうるのかという問題は、十分に議論されていないという現状がある。

申請者が調査対象としているカンボジア農村社会においても、1991 年のパリ和平締結以降、大量の開発援助が国内に流入し、国家レベルの政治経済的なマクロな変化のみならず、農民の行動様式や価値観といったミクロな生活世界まで変化を及ぼす歯車のひとつとなっている。参加型開発理念は国際援助機関によって 2001 年から普及され、農業、公衆衛生、教育といった幅広いプロジェクトに取り入れられ、実践されている。カンボジアで唯一の参加型農村開発の成功例と国内外から評されるプロジェクトにおいて、2009 年はじめ頃から NGO が国家同様に農民を統制する存在として農民にみなされるようになり、農民による

NGO に対する抵抗、プロジェクトからの離脱の動きへと発展した。

内戦後の社会混乱の中、国家政策が及ばない領域において支援活動を展開させてきた NGO に対して、なぜ人々は抵抗・拒絶するに至ったのか。また、なぜ非国家主体である NGO が、国家と同様の存在としてみなされるに至ったのか。これらの問いを明らかにするために、本研究では、参加型農村開発プロジェクトのプロセスを民族誌的記述に明らかにする。具体的には、NGO と農民の良好な関係に基づき、実施されていたプロジェクトが、国家、海外の援助ドナー、海外に移住したクメール人組織といった多様なアクターを巻き込みつつ、NGO に対する抵抗・独立の動きに至った展開に着目する。そして、現代カンボジアを生きる農民が「参加」という西欧由来の開発理念をいかに日常生活の中に組み込み、NGO や国家といったアクターと自らの自律性をめぐりいかに交渉し、主体的に生存手段を獲得しているかを記述する。最終的には、農民、NGO、国家の関係性の詳細な民族誌的記述を行なうことによって、開発援助における農民の「自律／依存」の問題系を人類学的調査により明らかにし、再考することを目的としている。

２．研究の目的

本研究の目的は、内戦終結以降のカンボジア農村開発をめぐる動きが、国家や NGO からの自律を志向する運動として展開してきたプロセスを描き出すことで、開発における参加と自律性について論じ、国家・NGO・農民関係を捉えるための新たな理論的モデルを提示することである。以上の目的を達成するため、まずカンボジア農村開発に関わるクメールの農民、NGO、国家それぞれの視点から、農村開発の実態の変化、特に開発で近年志向される主体的「参加」をめぐる変化を明らかにする。

その際、開発プロジェクトに大きく影響する開発の国際的なアジェンダと参加型開発政策の実施状況について明らかにする。また、カンボジアの参加型農村開発をめぐる動きは、経済、思想双方の側面において国際援助機関や海外（欧州や北米）で学位を取得したクメール人エリートの影響を強く受けているため、グローバルな人的ネットワークにも着目し、開発参加や人々の自律性の変化を明らかにする。並行して、開発と参加、国家・NGO・農民関係における農民の自律性に関する理論的研究も行う。

３．研究の方法

本研究目的を達成するために、以下の３つの問いについて文献調査ならびに参与観察、インタビュー調査を実施した。

１）内戦後のカンボジアにおける農村開発プロジェクトはいかに展開したのか。

２）村落内、都市/農村、国内／外という空間において、農民・NGO・国家というアクターがいかに相互行為を行い、関係を再/構築しているのか。

３）参加型開発プロジェクトが展開する過程において、クメール農民・NGO・国家の関係性はいかに変容したのか。

本調査研究は、次の４つのフィールドにて調査を実施した。

（１）カンボジア南部ターカエウ州での調査
（２）農村開発のモデルケースとも評される NGO のスタッフを対象とした調査
（３）農村開発が計画立案されるカンボジア農水省の行政官を対象とした調査
（４）農民組織を支援する海外ネットワークである国際 NGO を対象とした調査

４．研究成果

①グローバルな開発アジェンダと国家、NGO による開発支援の展開

カンボジア社会は 20 年以上にもわたる内戦と国際的孤立の時代を経て、1991 年のパリ和平協定を締結し、1992 年には国連カンボジア暫定統治機構（UNTAC）による統治が行われた。それ以降、年間平均 7.0%台の経済成長進む中においてもなお、海外から大量の開発援助を受け入れ、開発支援が全国規模で展開している。国際機関や国際 NGO、そして現地の知的エリート層によって組織されたローカル NGO もまた平和構築やコミュニティ開発、人権、グッドガバナンス、ボトムアップ型の民主化構築など多岐にわたる活動を行っている。これらの多くは、国際的な開発アジェンダの影響下にある。「人権」、「参加」、「民主主義」といった欧米由来の理念を掲げ、それらをローカルな社会的文脈と接合させ、翻訳しながらプロジェクトを進めている。

カンボジア政府の国家開発戦略（2019 年～2023 年）においても、国際協力を継続し受け入れ持続可能な包括的開発を推し進めていくためにも、各国政府、民間、NGO を含むパートナーと連携しながら、オーナーシップを強化していくことの重要性が謳われている。このように政府・民間・NGO 間の持続可能な開発のための連携の重要性について言及される一方で、2015 年 8 月には労働組合、協同組合などの結社と NGO 活動を規制する「NGO 法」が制定され、市民社会への統制が強化されている。

このように内戦終結直後の復興期から権威主義体制下における開発が進む現在まで、開発を取り巻く政治経済的状況も、国際機関、政府、NGO、民間といった開発に関わるアクターも、それらが掲げる理念も変化してきている。

②開発への人々の参加と自律性の変化

上記のような開発をめぐる社会的変化の只中で、農村に生きる人々はどのように開発と向き合ってきたのだろうか。調査地域である南部のターカエウ州における農村開発の大きな転換点となったのが 2001 年に開始された「参加型農村開発」プロジェクトである。参加型開発は国際開発の分野において、トップダウン型の開発への反省から導入されるようになった開発理念であり、カンボジアにおいては 2000 年代に広く普及された。

カンボジア南部ターカエウ州において、2001 年にカンボジア国内の NGO が開始した参加型農村開発プロジェクトは、農業技術の普及と農民組織形成に関する諸活動を全国に展開し、国内外の援助実務者や研究者から「成功例」として評価されてきた。参加型開発理念にもとづくこのプロジェクトは、それまで一般的だったトップダウン型のプロジェクトに

みられる NGO と農民の非対象的な関係性にもとづく支援ではなく、対称性を志向するかたちで展開された。通常、カンボジアにおける支援は、主に継続的な依存関係とも呼べるパトロン・クライアント関係にもとづいて実施される。しかし、参加型を銘打ったこのプロジェクトにおいては、社会的地位の異なる NGO スタッフと農民の水平的な関係性が志向され、農民が開発の主体となるという新たな形態の開発として、農民らに驚きと戸惑いをもって受け入れられた。

農民組織の活動は、NGO と農民間の公／私の領域横断的な相互行為ならびに互酬的な関係性によって展開した。しかし、次第に一部の農民リーダーらと NGO の間で農民組織の「自律的」運営をめぐる対立が表面化し、ついには農民による NGO への抵抗、協働関係の解消に帰結した。その際に農民達は、参加型理念を掲げる NGO も結局のところ国家同様に農民を統制する存在でしかなかったと批判した。「成功例」と評されたプロジェクトにおいて一部の農民たちは、なぜ支援を目的として介入してきた支援者を拒絶するに至ったのか。

この意図せぬ結果を引き起こした大きな要因の一つが、グローバルな開発潮流を背景とした「参加型開発」の言説とローカル社会における開発の実態との乖離である。プロジェクト開始当初、参加型理念にもとづく支援関係が、ローカルな支援をめぐる規範や実践とは大きく異なることから農民らの驚きや戸惑いをもって受け入れられた。その後、参加型言説を繰り返し用いながら農民との関係を構築し、プロジェクトを進めたことによって、対称性を指向する新たな開発（参加型開発）をより良いものとして受容し、理念を内在化させ自律的な振る舞いを身につけた農民も現れた。同時に、カンボジア社会において一般的にみられるパトロン・クライアント関係に基づく支援を望む農民もおり、自律を志向する農民や依存関係の継続を望む農民といった多様な開発との向かい方が見られるようになった。

このように農民による参加型開発のイデオロギーの内在化が見られた一方で、支援者である NGO は、農民組織活動の自律的運営や資金管理を人々が希求し、参加型理念が具現化しようとした瞬間、農民の自律を拒み統制する態度へと一変させ、自分たちの管理の必要性を説いた。つまり、NGO にとって参加は単なる理念にすぎず、プロジェクトを運営するための道具的意味合いしかなかったといえる。

このように見ていくと、開発の場は NGO と農民の二者関係のみで成立するわけではないことがわかる。グローバルな開発言説の影響を受けながら、開発に対して多様な向き合い方（参加・傍観・拒絶、自律・依存）をする農民や NGO スタッフが相互行為を行っている。また、人のみならず、モノや技術の導入もまた両者の関わりを強化したり、弱体化させたり、断絶を生み出す契機となり、場を織りなしていく。そこには開発の論理のみならず、公／私的領域や政治・経済的領域が内包する独自の規範性や指向性も関わってくる。このような視点から開発の場を捉え直すと、自律／依存といった先行研究の議論の枠組みだけでは捉えきれない、複合的かつ流動的な支援関係のあり様が見えてくる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　4件）

１．著者名 秋保さやか	４．巻 29
２．論文標題 贈与と交換の狭間の開発支援	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際開発研究	６．最初と最後の頁 37～54
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32204/jids.29.1_37	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大山 貴稔、秋保 さやか	４．巻 29
２．論文標題 UNTAC日本施設大隊はカンボジア社会にいかなる影響を及ぼしたのか	５．発行年 2020年
３．雑誌名 国際開発研究	６．最初と最後の頁 105～120
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32204/jids.29.2_105	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 秋保 さやか	４．巻 28
２．論文標題 現代カンボジア農村における月経をめぐる規範と実践	５．発行年 2019年
３．雑誌名 国際開発研究	６．最初と最後の頁 19～33
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.32204/jids.28.2_19	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Sayaka Akiho	４．巻 4(1)
２．論文標題 How “Khmer product” is Made Through Development Process: Focusing on Changing the Value of Agricultural Products in Contemporary Cambodia	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Journal of Asian Rural Studies	６．最初と最後の頁 71～87
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.20956/jars.v4i1.1828	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 Sayaka Akiho	４．巻 2020
２．論文標題 Growing Khmer Products: Food Identities and Safety in Times of Globalization	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Proceedings of The Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology	６．最初と最後の頁 1～18
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

１．発表者名 大山貴稔・秋保さやか
２．発表標題 農作地から宿営地、そして国有地へ ―現地社会から見たUNTAC日本施設大隊―
３．学会等名 国際開発学会 第21回春季大会
４．発表年 2020年

１．発表者名 大山貴稔・秋保さやか
２．発表標題 UNTAC日本施設大隊を現地社会から捉えなおす―「場所」という分析枠組みを糸口に―
３．学会等名 日本国際政治学会 国際交流分科会 定例研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Sayaka Akiho
２．発表標題 Development Assistance: The Space between the Gift and Exchange
３．学会等名 AAS-in-Asia 2020 of The Association for Asian Studies and The International Academic Forum (Virtual Meeting)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Sayaka Akiho
２．発表標題 Growing Khmer Products: Food Identities and Safety in Times of Globalization
３．学会等名 The 2020 Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 秋保 さやか
２．発表標題 クメール農民の自律をめぐるモラリティ―内戦後カンボジアにおける農村開発の事例から―
３．学会等名 日本文化人類学会 九州・沖縄地区研究懇談会
４．発表年 2019年

１．発表者名 秋保 さやか
２．発表標題 カンボジア農村における月経をめぐる実践はいかに変容しているか ―クメール女性のライフコース に着目して―
３．学会等名 国際開発学会・人間の安全保障学会 2019 共催大会（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sayaka Akiho
２．発表標題 Why do they grow “organic crops?”- Development and crop commercialization in Cambodia
３．学会等名 Society for East Asian Anthropology (American Anthropological Association)（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 秋保 さやか
２．発表標題 現代カンボジアにおける月経をめぐる規範と実践：女性のライフコースの変化に着目して
３．学会等名 東南アジア学会九州地区特別例会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Sayaka Akiho
２．発表標題 How Khmer product is made through development process: Focusing on changing the value of agricultural products in contemporary Cambodia
３．学会等名 The 6th International Conference of Asian Rural Sociology Association（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 秋保さやか
２．発表標題 贈与と交換の狭間の開発支援ーカンボジアにおけるNGOの社会的企業化の事例からー
３．学会等名 国際開発学会 第29回全国大会
４．発表年 2018年

１．発表者名 Sayaka Akiho
２．発表標題 What Has Changed Since an NGO Became a Social Enterprise?: A Case Study of Rural Development in Cambodia
３．学会等名 The 2022 Annual Meeting of the Society for Applied Anthropology (Hybrid conference)（国際学会）
４．発表年 2022年

〔図書〕　計3件

1．著者名 大嶋えり子、小泉勇人、 茂木謙之介編	4．発行年 2020年
2．出版社 雷音学術出版	5．総ページ数 157
3．書名 遠隔でつくる人文社会学知 ： 2020年度前期の授業実践報告	

1．著者名 杉田映理、新本万里子編	4．発行年 2022年
2．出版社 世界思想社	5．総ページ数 304
3．書名 月経の人類学ー女子生徒の「生理」と開発支援	

1．著者名 大山貴稔、秋保さやか	4．発行年 2021年
2．出版社 村田学術振興財団	5．総ページ数 744
3．書名 Annual report of the Murata Science Foundation 年報	

〔産業財産権〕

〔その他〕

Research map
https://researchmap.jp/sayakaakiho

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関